

「順ちゃんの戦場」

新美虚炎著



人は戦争を、よく『悲惨』や『残酷』という言葉で言い表そうとする。とくに戦後生まれの人間は、想像力を働かせるあまり、自分が安易に独自の思いや判断に頼っていることに気づかない。だが、経験した者にとり、戦争とはどんな言葉にも変換不能なものなのだ。まして戦死した者の代弁はおさらだ。それでもあえてその役目を引き受けた人間もいる。

これは絵本というより『事実』の本である。本著はまず、見開きのルソン島地図の後、戦場のジャングルで拾った『日本降伏』と書かれた落下傘ニュースの現物コピーで始まる。敗戦を知らせるため米機がまいたものだ。「まず開いてすく、子どもたちに事実の重さを知ってほしかったのです。それにはこれを見てもらうのが一番かなと思って」

本評を書くにあたり、訪問する機会を得たとき、作者は掲載の意図をこう説明された。一枚の紙片、写真、捕虜番号の人間荷札、そ

深い悲しみ映す「事実」の書

して作者の描いた絵の数々に、抑制された言葉。次の世代へ事実を伝えていくとき、視覚的映像や物のもつ力がいかに大きいか、彫刻家でもある彼女の感性の裏うちがそこにある。途中こんな話ものせられていく。ルソン島に慰霊に行った際、州知事からぜひ会いたいという知らせを受け、出かけることになった。「私は何を怒られるんだろうと心がざくざく思いました。だって日本人は謝っても謝りきれないほど悪いことをしててんですから」

ところが州知事は、戦禍の中で逃げまどう在留邦人婦女子を助けることができなかったことを許してください、と深々と頭を下げられたのである。また作者はかつて飢えに苦しみ、果物をぬすんだ経験があった。罰を覚悟の上で持ち主の家へ一人できき、精一杯謝罪した。そのときも、小さい子どもをつれての逃避行は大変だから、戦争がすむまでかくまってくれるといわれたのだ。

地獄に追いやられた側が追いやった者へ示す思いやる心は、戦争の暗黒さとは対極にある光だ。愛娘の死を経て当事者が見た光は、真実の向こうに深い悲しみを照らしだしている。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

◇にいこえん 1917年生まれ。画家、彫刻家。熊本市在住。